

- 1 派遣期日 平成28年10月19日（水）
- 2 研修先 学校名（会場名）埼玉大学教育学部附属小学校
所在地 埼玉県さいたま市浦和区常盤6-9-44
<http://www.fusho.saitama-u.ac.jp/>

3 研修内容

研究主題 「学びの本質」を育む教育の創造
～新しい時代に求められる思考力・判断力・表現力～

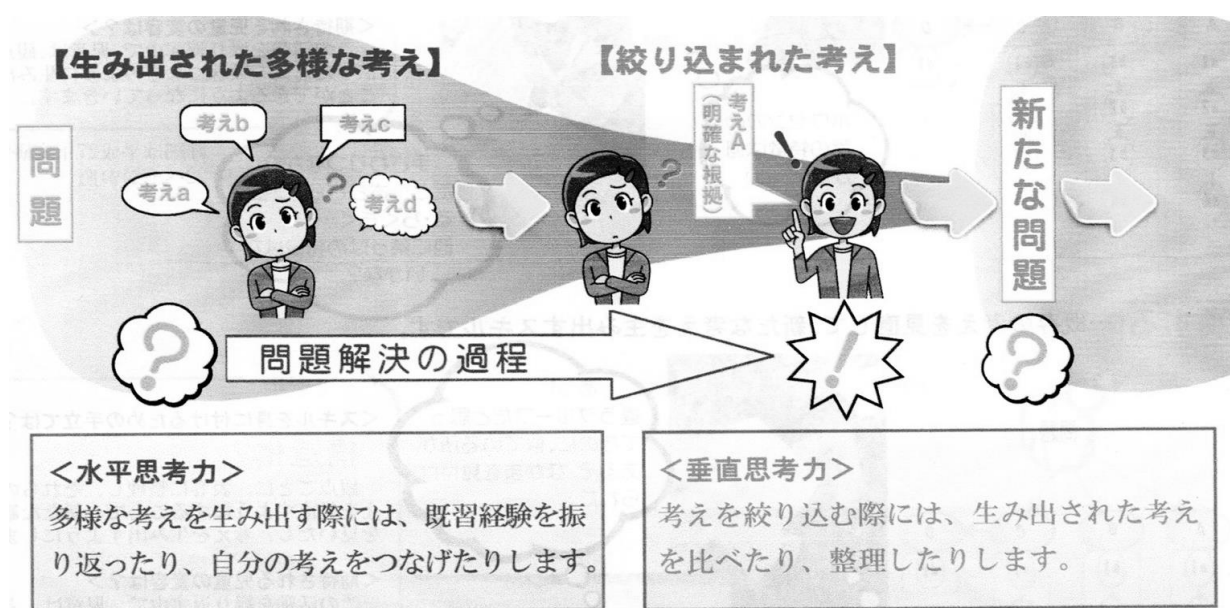
（1）はじめに

埼玉大学附属小学校は「『学びの本質』を育む授業の創造」という研究主題のもと継続研究を行い、本年度で5年次となる。また次期学習指導要領の目指す方向を受けて、副題「新しい時代に求められる思考力・判断力・表現力」を掲げた。学びの本質とは全教科・健康教育等に共通の学力（マスターキー）をとらえ、その中でも思考力・判断力・表現力のマスターキーである「水平思考力（課題に対する自分の考えを複数出せる力）」と「垂直思考力（課題に対する自分の考えを再構成する力）」に着目して研究の実践をしている。大学の附属機関としての視点も取り入れ、教材研究等から大学との連携を密に行っている学校である。

（2）研究内容

水平思考力：考えを増やしたり広げたりするためのマスターキー
垂直思考力：増やした考えを絞り込むためのマスターキー

二つの思考力に着目し、問題解決の過程で多様な考えを生み出して、明確な根拠をもって考えを絞り込んでいる姿を目指した研究を行っている。



（埼玉大学教育学部附属小学校 研究概要リーフレットより）

(3) 授業実践から

第6学年3組 国語科「浸ろう 宮沢賢治の世界 ～賢治ブックハウスで推薦しよう～」

①単元を貫く言語活動の実践

本単元を通して学習の跡を残し、自分の考えの変容や既習事項をいつでも振り返ることができる有効な手段となっていたのが、ブックハウスである。宮沢賢治の作品から自分のお気に入りの一冊を選び、ブックハウスを使って推薦する。一人一つダンボールを装飾したブックハウスをもち、内側には宮沢賢治の写真や「イーハトーブの夢」と伝記から考えた宮沢賢治の人物像などが貼られている。机いっぱいの大きさで中に本を置いて読み、叙述を根拠にしながら考えられるようになっている。子どもたちはブックハウスを完成させることを楽しみにし、これまでの学習内容や自分の思考を振り返ったり、関連付けたりしながら意欲的に学習を進めていた。言語活動が目的ではなく学習における有効な手段となる理想的な形であった。

②本時の授業における水平思考力と垂直思考力との関わり

本時の課題は「作品にこめられたメッセージは何か」である。前時までの学習の中で児童から出た考えを大きく5つ（命・科学・自然・人・思いやり）に分け、自分の考えに近いものを選択する。水平思考力（考えを広げる）を育むための手段として、同じ作品を選んだ人で考えを交流する活動と異なる作品を選んだ人との交流が行われた。根拠となる叙述は同じでもそこから感じるメッセージが人によって異なることや、話の内容は違っても自分と同じメッセージを選んでいくことに児童自身が気づき自分の考えを見つめなおす児童の姿があった。読むことの学習では、自分の考えに固執しすぎて独りよがりな読みになってしまいがちである。しかし叙述を根拠にして説明し合うことで、考えに対して質問したり議論したりするなど児童間の交流が深まっていた。垂直思考力（増やした考えを絞り込む）を育む手段として、自分の考えをふくらませた後に絞り込む活動に移った。他の作品や宮沢賢治の生い立ちから自分の考えとの共通点を見つけ、自分の考えを述べている児童をグッドモデルとし、自分の考えを200字程度にまとめる。グッドモデルの提示により、友達との交流で生まれた多様な考えを分類・整理し自分の考えと関連付けて考えを再構成する児童が多く見られた。観点の設定が明確にされていたので、どの児童も戸惑うことなく黙々と取り組むことができたのだと思う。

(4) 感想

「『学びの本質』を育む授業の創造」というテーマのもと、全教科において課題研究に取り組まれており、大変参考となる研修となった。テーマ自体は私にとって少々難しい内容であったが、大学の附属機関として教材研究や指導法の研究を積み重ねた授業を参観できたことは、改めて自分の授業を見つめなおすよいきっかけとなった。焦点化・グループ化は自分の授業でも何気なく取り入れているものであるが、ねらいや目的を意識して行うことでさらに児童の思考を活発化させるのだと実感した。今回の研修の機会を頂いたことに感謝し、今後の教育活動に生かしていきたい。